

令和2年度 第1回 稚内市総合教育会議 議事録

◆ 日 時

令和2年11月6日（金）午後3時00分 開会 / 午後4時00分 閉会

◆ 場 所

稚内市役所5階 正庁

◆ 出席者

(構成員)	市 長	工 藤	広
	教 育 長	表	純 一
	教育委員	山 本	泰 照
	教育委員	佐 賀	孝 博
	教育委員	伊 藤	輝 之
	教育委員	門 間	奈 月
(職 員)	まちづくり政策部長	渡 辺	直 人
	教育部長	佐 伯	達 也
	子ども子育て対策監	細 川	早 苗
	教育総務課長	秋 山	淳 一
	学校教育課長	山 川	忠 行
	スポーツ・レクリエーション担当主幹	中 村	直 樹
	教育総務課主査	江 戸	唯 之
(事務局)	地方創生課長	遠 藤	直 仁
	地方創生課主査	木 村	博 之
	地方創生課主査	市 川	美 紀
	地方創生課主事	堀	耀 太

◆ 協議事項

(1) 教育課題について

- ①児童生徒の学力向上対策について
- ②小学校における英語教育について

(2) その他

1. 開会のことば

【事務局（地方創生課長）】

ただいまより令和2年度第1回稚内市総合教育会議を開催いたします。事務局を担当しています地方創生課の遠藤と申します。開催にあたり、始めに工藤市長よりご挨拶申し上げます。

2. 市長あいさつ

【工藤 市長】

今日は大変お忙しい中、総合教育会議にご出席いただきましてありがとうございます。

つい先月くらいまでは、コロナが収まってきたかなと思っていたところですが、このところ札幌を中心に深刻な状況が続いていると思って受け止めていました。わがまちもご承知のとおり、先月感染者が発生し、何とか次の感染者を出さないという思いで一生懸命取り組んできていただいているところですが、中学生の感染が確認され、この後は少しでも現場が混乱が生じないように取り組んでいきたいと思っています。

話は変わりますが、今年度は現在取り組んでいる第2次稚内市教育大綱の3年間の中間年度でございますが、引き続き皆さんには積極的にご理解を賜りたいと願うところですが、今日は今年から始まった小学生の英語教育の話題、順序が逆になりますが、議会で様々な指摘を受けていて、もちろん市民の皆さんも一番関心の高い児童生徒の学力向上問題について現状をご説明し、皆さんの忌憚のないご意見を賜りたいと思います。それを今後の現場の取り組みにしっかりと反映させていただきたいと考えておりますので、よろしくようお願い申し上げます。開催にあたっての挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

【事務局（地方創生課長）】

この総合教育会議は運営要綱上、市長が司会進行するとなっておりますが、進行については私の方で説明させていただきたいと思います。早速会議に入っていきます。なお、会議を開催するにあたり、議事録の署名については、本会議運営要綱第7条3の規定に基づき、門間教育委員を指名させていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。なお、議事録については、事務局が作成いたします。

3. 協議事項

(1) 教育課題について

①児童生徒の学力向上対策について

【事務局（地方創生課長）】

それでは、協議事項に入ります。本日は、2つの項目で会議を進めさせていただきます。始めに、児童生徒の学力向上対策についてですが、今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響において全国学力学習状況調査、いわゆる全国学力テストについては、中止となっております。

学力については、これまでも厳しい状況が続いておりますが、今後の学力向上対策の一つとして、今年から道教委チャレンジベスト及び宗谷教育局のサポート問題を活用したSサポートが始まっています。これらを含めて、表教育長より説明をお願いします。

【表 教育長】

いつも学力問題では、肩身の狭い思いをしてここで話をさせていただいていますが、司会からもあったように全国学力学習状況調査を4月末に実施していますが、新型コロナウイルス感染症の関係で今年度は中止となりました。例年、全国学力学習状況調査の結果を道教委が分析した内容を全道的に比較検討したものをこの場でお話をしながら、客観的に稚内市や宗谷管内の現状、立ち位置の説明をしながら、今の稚内市の厳しさをお話させていただいていました。しかし、今年度に関しては、全国学力学習状況調査が中止になり、客観的な数値がない状況でありますので、今の取り組んでいる状況について若干ご説明させていただきます。

司会からもあったように稚内だけではなく、宗谷管内10市町村すべてにおいて学力問題が大きな課題となっているという中で、宗谷教育局においては、管内の子どもたちの学力を底上げしていこう、そして、子どもたちの未来保障をしていこうという思いから、方策はわかりやすく、学校現場においても定期的な検証ができ、それが授業改善に繋がるようなシステムとして、今年度からSサポートという問題を用意してもらって、宗谷管内の小学校1年生から中学校3年生までの子どもたちに実施し、その中で子どもたちが今、どういう状況に置かれているのか、どの部分が弱いのか、その弱さの原因はどこにあるのか、つまりいたところはどこなのかを含めて、今までの全国学力テストでは、小学校6年生と中学校3年生が4月に実施するので、問題としては、小学校は1年生から5年生までの問題、中学校は中2までの問題を対象とした内容で比較検討していたんですが、今回は、宗谷管内だけとはいえ、小学校1年生から中学校3年生まで全員が一定程度同じ方向性を向いた問題に取り組むということでそういう意味での管内の傾向、稚内市においては、稚内市の分析をしてもらっておりますので、そんな傾向が出ている取組を進めているところです。

資料1に実際に小学校5年生と6年生の国語と算数の問題がありますが、このSサポートにおいては、どちらの問題も3題程度、指導主事が厳選した優良な問題を出していますので、そういう意味では、非常に傾向がつかみやすい問題だと思っておりますし、時間としても10分程度で出来る問題ですので、学校現場では採点はしてもらっていますが、先生方においてもこの問題については、たかが3問だけ、されど3問だなというような評価というか自分たちが考えていた以上に稚内市の子どもたちの課題が顕在化するような問題であると評価が高いと認識しています。

また、資料2では、抜粋といいますか、学校名は出せませんが、今までSサポートを2回やった結果をこのように各学校ごとに正答率をすべての学校において出してもらっています。今は、この問題が3問なんですが、将来目標としては、この問題をすべての子どもが最低でも2問正答できるようにしたいということを今の近目的な目標数値としながら進めているところであり、この問題を各学校では、定着させるための手立てとして、この問題を活用しながら授業の中で活用しているところです。

そんなことを含めながら、最大は授業改善が必要なんだろうということで、そういう意識も定着できておりますので、取組と相まってなんとか宗谷管内の今回は数値が出ていませんが、来年以降の学力テストにおいてもしっかりと数値が取れるような方向に向けて子どもたちがこのまちに生まれたからこそ未来が保障されるような学校教育の実現に向けて、それぞれの学校において取り組んでいるところであります。一朝一夕にはなかなかいかないのが現実ですが、今までできなかった分析を含めて進めていってもらっているので、その成果を是非出していきたくて考えているところです。まずは、Sサポートを含めた学力向上の取組についてお話をさせていただきました。

【事務局（地方創生課長）】

ただいま、表教育長よりSサポートを活用した学力向上対策について説明をいただきました。委員の皆さんからご意見とご発言をいただければと思います。

【山本 委員】

学力テストは全国的にやっていて、予算的なことでいえば、実施するたびに60億くらいかかっているらしいです。学力テスト自体は全国的にやってはいますが、段々と本来の目的である学力を伸ばすところより、お互いの県が戦いというわけではないですが、エスカレートしてきている状況にあるようです。果たして、この学力テストは北海道の中で特に何回も実施してきた中で効果があるのかというような疑問もあります。そういう点でいえば、宗谷総合振興局が考えているというような取組ですが、今回を見ても良いところも悪いところも見えてくる中でこの取り組みはベターじゃないかなという気がしています。当然、定期的にやる必要があるのかということもありますが。また、これからの話になろうかと思いますが、先生が足りないという現実があります。特に英語教育、それから色々な取組などに対処していかなければならないし、学校の先生自体が学校顧問もされるので休みもなかなか取れない、教頭先生が教育現場で話さなければいけないという問題が出てきています。やはり先生方が足りないんじゃないかと。それと英語教育なので、小学校は特に大変だと思います。なんとか予算を割いて手立てをしていってもらった方がいいなと思っています。

【事務局（地方創生課長）】

山本委員より学力テストが毎年必要なのかということと、先生が足りないんじゃないかという話をいただきました。そのほかご意見等ございますか。

【伊藤 委員】

長年、学力低下の問題は言われている中で、なかなか効果的な手を打てなかったことについては、宗谷教育局からこのような手立てをしていただいて、それは市独自で分析できるというところで大きな前進にはなるのかなと思っています。それをどういうふうに教育現場に活かしていくかというのはこれからの話になりますが、一つのきっかけには大きくなっているというイメージを受けています。

Sサポートの評価も悪くないようですので、まだ期待したいという印象でいます。もう一つは、これはすごく難しいことですが、教える側は、これで改善されていくかもしれないですが、子どもたちの教えられる側をどういうふうに学ぶ意欲を高めていくのかということも相当難しい問題だと思っています。両輪でいかないとなかなか向上していかないと思っていますので、そっちも何か策を考えていかないといけないところもあるんだろうなと思って聞いていました。

【門間 委員】

伊藤委員に繋がる場所もあると思いますが、先ほど教育長がおっしゃっていた授業改善というところで意欲をもって学ぶ、やりたいことに対して教える側も教えられる側もエネルギー感というか、わくわく感が出てくるのかなと思います。先生の立場にしてみると、授業に対して準備をする、例えば、授業があるから大変と思って、辛い苦しい状況で授業の準備をするのと、子どもたちが楽しく学ぶ、わく

わく感を持ちながら準備をされるというところ、そういう先生たちのあり方、それは先生たちにも個人差があると思うので、やりがいを持てる現場、それは子どもたちにも伝わると思います。

先生自身の状態がいいと、子どもたちにも良い関わりが出来る中で楽しい授業が出来ていくと考えたときに取組の中で目に見えるテストや数字は大事ですが、実際目に見えない先生の内面的なところのサポートが大切になってくると感じています。

【佐賀 委員】

S サポートは、先ほど教育長もおっしゃったように3問だけとはいえ、厳選されていて良い取り組みだと思っています。ただ、学区によってできたりできなかったりで先生方も改善をされていると思いますが、今年は授業回数に関係もあるのでなかなか難しいかもしれませんが、3月にもう1回やってみて本当に上がったのか、もっと言うと、学力テストの去年の過去問をやってみてどうだったのかというところがあると、もう既に検討されているかもしれませんが、そういうのがあると、改善したとか身についたということが視覚的に可視化されるのかなと思っています。そうなればいいなど。

【工藤 市長】

問1であれ、問2であれ、国語も数学もそうだけれど、1回目よりがくと悪くなるケースがある。伸びてくれるならそれはそれで効果があるという話になるんだけど、がくと落ちているものに対して何をどうするのかというのはよくわからない。最初の間1は何を理解しているのか、理解していないのかということを求めているのかというのがわからないのと、1回目より2回目はもっと点数が上がっていないといけないはずなんだけれど、それは教材がいいのか、教え方がいいのか、そういう評価はどのようにしているのかというのが素朴な疑問。

【表 教育長】

今、市長がおっしゃった話で小学校5年生の1番目の問題は、接続詞を選ぶものについては、非常にいい成績ですよ。ここはきっと、稚内市においては、多くの方が理解しているということがわかる。

6年生の国語の問題は、敬語の問題なんです。敬語に直しましょうというものについては、非常に低い。学校差もありますが、これは、稚内市においては、少しそれなりに時間をかけないで過ぎてしまったところがあるのではないかと。この問題は、5年生で習った問題なんだけれど、敬語については非常に弱い。

【工藤 市長】

単純に算数で一番低い真ん中の学校がある。どの学年を指しているかわからないけれど、こういうのはどうその学校は判断すればいいの？この表で何を学校に対して言わないといけないのかがよくわからない。全部100点の学校もあるし、10%の学校もある。そこはどういう指導をする話になるの？

【表 教育長】

算数は、その問題が定着されていないということですね。

【工藤 市長】

結果はね。先生に対して指導が良くないと？

【表 教育長】

それに対して弱いというか、それに対して指導の方針として間違っていたんじゃないかということについて先生方にはある意味警鐘になるような、わかりやすく指摘される問題だと。

【伊藤 委員】

今までは、子どもたちの強い弱いという傾向さえも分かっていなかったと言っていました。それを確かめて、そのあとどういうふうに学校に指導していくかということも判断していく材料だと思います。

【工藤 市長】

それはよくわかります。でも、このひどい数字を残しているということは、それは先生の責任だということになれば、今まで何だったんだということになる。

【表 教育長】

それは、先生の責任というか、当然この数字を見たら非常に課題があるだろうと。ただ、これだどこの学校なのか私もわからないのですが、数が少ないと一人の子に引っ張られてしまう傾向にあるので、一概には言えないのですが。

【工藤 市長】

ただ、S サポートの結果について市独自の詳細な分析を行いとなっているけれど、それなりの分析はされているの。

【表 教育長】

まだ市独自というところまでいっていないが、まずは各学校ごとに教育局からきますので、それを基に各学校の中で課題をしっかりと把握して、それを授業改善につなげるシステムをすぐにやらないといけないということについては、非常に効果があると。

【門間 委員】

これらの問題の意図するところ、この問題を解けることでどういう力がついているのかとかは。

【表 教育長】

そういうのは学習指導要領の中にありますから、その問題は先生方は十分理解していると思います。今までと違うのは、今までの全国学力テストは、小学校6年生と中学校2年生しかしていないので、言い方は悪いですが先生たちにとってみれば自分の責任ではないんですよね。今までの積み重ねなので誰かの責任にできたんだけど、今回だけは誰の責任にもできない課題をここでしっかりと示されていることについては、今までとは大きな違いがあるのかなと。

【工藤 市長】

受ける側の先生はそれを理解できるのか。

【表 教育長】

できますよ。その中で指導方法を変えて、それは学校長を含めてそういう話にはなっていると報告は受けているので。

【山本 委員】

これ自体は今年初めてということですよ。試みというか、そういうところで、結構浮き彫りに出てきてしまっているところがありますが、それは改善していくしかないということなんですよ。

【工藤 市長】

市独自による詳細な分析、そこにこだわるけれど。

【表 教育長】

そこは専門家ではないので、指導主事でもいないとなかなかできないと思っています。

【工藤 市長】

結果は、指導主事まで責任が転嫁されてしまう。これをこのまま鵜呑みにしてしまうと。どこかではしっかりとした取組を求めていかなければならない。それを、よく職員にも言うけれど、やります、やりますではなくて、やった結果を示してねという話にちゃんと結び付けていかないと、分析はいくらでもできるけれど、最終的には子どもの理解を高めるというものが狙いなので。

【事務局（地方創生課長）】

そのほか、この資料について、あるいは学力向上について何かございますか。

【伊藤 委員】

まずは、市教委の中で指導主事を作っていく方向にしなければいけないということですね。

【山本 委員】

そういうふうになってきつつあると。学力テストは、結果は後に出てくるので、そのお子さんは進んでいってしまっているのです。そういう点でいけば、こういう方が記述で見れるということと、今問題のあるお子さんをいかに指導していくかということにつながっていくと思います。

【工藤 市長】

余計な問題を定義するつもりはないけれど、医者と一緒にうちには若い医者しか来ないと。どうしても中堅の力のある医者は大学に残したいと。医者の場合ですよ。それと同じように、これは子どもに問題があるのか、教え方に問題があるのか、その教え方もトータルで22歳から60歳の先生がいるわけだ

から、指導主事に何かを求めるということは結局はある程度経験のある人にそこを委ねたいということだと思つるので、そこは、今の体制で先生は大丈夫かというのは一つあるのかなという気はする。だからといって、勝手にああでもないと言える話ではないと思うけれど。

【表 教育長】

決して子どもたちの能力が低いとは思わないです。まずは先生方の責任は大きいと。子どもたちも家庭学習の問題は当然ありますが、先生方がまずはこの学校の中でさっき門間委員が言ったようにしっかりと準備して、わくわくするような授業をある程度先生が出来れば、当然学力は上がっていくだろうし、そういう意味でも先生方は準備というより、授業改善に向けての取組がまだまだ弱いという認識を今回のこの問題を見てもそこらへんは明らかになっているんじゃないかなと。

【山本 委員】

今回のコロナの関係で、当初は自宅学習をやってきました。タブレットについては、これから入ってくるんですが、本来であればタブレットがあれば、道教委などで算数や国語は特にそうだと思いますが、理想的な教えるというか、教え方はあるはずで。それに対して、道教委やそういうモデルの授業を配信してもらって、生徒もさることながら先生方もそれを見ながら勉強してもらおうということも必要だと思っています。スキルというか教える技術を向上させるということがそういうものを使ってできるような環境になってほしいというのが私とすればそのような感覚があります。

【工藤 市長】

なかなか指導というか、学力を上げるという意味での教育は、さっき医者のお話をしたけれど、医療の場面でもこれから AI など遠隔医療がどんどん入ってくるんだろうなと。そういうものは基本的には技術の問題、技術といったら失礼だけれど、科学的な話だから、コンピューター、そういう機械が得意な分野で、教えるということだけ考えると、それは先生よりも AI の機械の方がすぐれているんじゃないかと。今、ギガスクール構想みたいなものがあって、それがそのとおりになるかわからないけれど、こういうまちだから塾も少なく、テレビで公文式などでやっているけれど、学力だけのことを考えるとそういう方法にこれから向かっていくのかなと、機械化が進めば進むほどある意味本当に先生はどんどんそっち側に向かっていくぞと。先生のなり手も少なくなっているから、余計に機械に対応する話は膨らんでくるんだろうけれど、本当に先生にはそういう危機感をもってもらわないと、機械にとってかわられると。人間教育などはまた別な話だけれど、そういう時代が目の前に来ているということを先生たちには考えてほしいなと思います。それがいいかどうかはわからないけれど、確率的なこれを覚えろ、あれを理解しろというんだったら、AI が今までの知識を全部ため込んで全国に流してやった方がもっと効率がいい、学力が向上するという意味での教育はそっちの方がずっと効率的だと思う。そうであってほしいとは思っていないけれど、時代は本当にそういうことだよと。そうしないと、我々はよく人口減少で怒られているけれど、医療が駄目、教育が駄目だと、必ず地方にいてマイナスの要因はたくさんある。それをなかなか乗り越えられない。この成績もそうだけれど。それだったらいっそのこと、みんな平等に情報を与えて、教育してくれる方が子どもたちにとっても家庭にとってもいい話なのかもしれないという感じを最近持っています。

【表 教育長】

よく市長がおっしゃる Society5.0 社会に向けては、新学習指導要領もそれに向けて進んでいるんだけど、まさしく正解が一つではない時代へ向かって、どう変わるかわからない社会で教育がどうあるべきかということについては、確かに何か教えるのに一つの答えを教えるのは AI もできるかもしれないけれど、答えがいっぱいあって自分の考えはこうだよと説明できる能力がこれから求められていくんだろうと。

一つの答えがいっぱいある答えの中で、自分が主張できるのはこうやって論理的に主張できるというそんな能力と両方を併せ持っていくという教育が今当然、新しい学習指導要領では求められているので、GIGA スクール構想もそうだけれども、片方では論理的にしっかりと自分の考え方が一番正しい、その理由はこうだと言えるよう人間を育てていかないといけないなど。

【工藤 市長】

少なくとも AI は、将棋でもどっちが勝つかという、何もない所からいろんな手を考え出すくらいの進歩をしているわけだからどこまでできるかというのはよくわからないけれど、人間ができることは人間、機械ができることは機械がという方向にどんどん向かっていっているから特にこういうレベルの話でいくと、むしろ AI に任せた方がずっと効率がよくて、みんながレベルを上げていくのには最も効率が良い手段かもしれないと思う。だからといってそれが良いと言っているわけではないけれど、そういう危機感をもって教育に臨んでほしいということだと思います。

【伊藤 委員】

市長がおっしゃっているようにそういうふうにして考えて、教員は教えるのが上手い人、下手な人がいるのでファシリテーター的なそこはうまい人の動画を見るなり、そこにいる先生はそこでできない子はどこでつまづいているかをもう 1 回確認するとかそっちの方に集中したほうがいいんじゃないかという意見をおっしゃっている方もいて、うちの息子もそういう動画のサイトで塾は行っていませんが、月 2 千円くらいのものですが、科目でいったらそっちの方がわかりやすいと。ただ、それは受験のテクニックなので人間教育とは切り離れたものですが、単に学力を上げるということであれば、そういうことの方が効率がいいというか、わかりやすいとなるような授業展開も可能なのかなと。

【門間 委員】

学力は、紙に書いてある問題を解ける、正答率になると思いますが、子どもの頃を思い出したときに 300 円で何を何個買ってと、駄菓子屋さんに行くとおばちゃんが出て、そこでリアルなコミュニケーション、言葉を交わして自分で根拠をもって物を選んで足りる、足りない、そういう中で自然と数とか掛け算とかどういう言葉で何が欲しいと伝える力は便利のない時代は、日常生活の中で培われてきたと思います。今でもそういうことが出来る人もいながら便利になりすぎると、そこまでしなくても簡単に手に入ってしまうということが増えた中で、先ほど答えは一つじゃない、自分の意見はこうだと言える人間教育ということも教育長から出ていましたが、偏ることなく経験と便利なものを使いながら生活の中で学んだことを活用しながら府に落として、実際問題を見たときに想像とか経験したものと繋がるというようなことになると、学力と人間力がともに育っていくと感じています。学力テスト、数字という背

景も含めて底上げしながら目に見える課題を両方からやっつけていかないと、テストの点数だけよくなっても、その人が実際に大人になってどういう人間になってどう生きていくのかといういろんな社会問題がありますが、生きていく力の一つとして学力、行動力、感受性、表現力いろんなものをつなげてやっつけていかないといろんな問題は解決しづらいんじゃないかと思います。話が少しずれたかもしれませんが。

【事務局（地方創生課長）】

様々ご意見いただきました。学力の問題については、これからも続けて議論していきたいと思っています。

②小学校における英語教育について

【事務局（地方創生課長）】

次の協議事項に入ります。小学校における英語教育についてです。新たな学習指導要領の実施に伴い、これまで5、6年生で行っていた外国語活動については、3、4年生で実施をし、変わって5、6年生については、英語科としてこの春から学習することになっています。今年度から初めてということもあり、塾講師等による英語指導補助員の指導も始めているところです。この件について、表教育長より説明をお願いします。

【表 教育長】

小学校に英語科が導入され、まさしく教科書があって、評価も付くということが小学校5年生から始まるようになりました。英語の教科書は、以前市長にも見てもらったんですが、我々が中学校で習った教科書が小学校5年生から英語を勉強するということが行われているというのが現状です。その中で、英語においては専科指導ではなくて、学級担任が英語も教える、学級担任が国語、社会、理科を教えるように英語も教えるというような状況です。先生方は、自分たちが大学で教員免許を取ろうとした頃には、英語科はない中で実際に小学校5、6年生に英語を教えないといけない状況になりました。一部研修をしたと言いつつも、非常に先生もそうですし、私たち教育委員会から見ても不安なスタートなんだろうと思っていました。そういう中で、今年度から昨年市長にお願いをして、稚内では英語に堪能な全国展開の塾や個人塾をやっている人がいるので、是非その人たちの力を借りて、小学校の学級担任が英語をやる場合の支援に役立ててもらいたいと予算化をお願いし、実現できたところです。

色々な意味で半年くらい進んできて、先生方の評価を聞くと、不安が解消できた。発音がなかなか自信がないという中では、塾の先生方は非常にネイティブに近いような発音でしっかりと対応してくれる。そういうことを含めて、T1が学級担任、T2が支援員という形でやっているんですが、どこの学校においても非常に高い評価を得ています。私たちの思いとしては、先生方が不安ということではなく、そこから波及して子どもたちが英語をしっかりと覚えられない、英語が不得意になる、嫌いになる、それでいて中学校に入っていくということだけは避けたいと、そんな思いで今回の指導補助員を活用した小学校英語の支援をスタートさせたところです。この目的である、子どもたちが英語を好きになって、もっと勉強しようという意欲をもって英語の勉強ができるように、授業については、せっかく入れてもらった事業なのでまずは3年しっかりと補助員制度を活用しながら小学校英語を充実させていきたいと考えているところです。

【事務局（地方創生課長）】

表教育長より小学校における英語教育のご説明をいただきました。委員の皆様からご意見、ご発言をいただければと思います。

【山本 委員】

学習指導要領で決まっていますが、現場とそれが乖離しているという部分もあって、なかなか英語は各校によって取り組み方はまだ始まったばかりでもありますし、なかなか難しいと思います。その中で今回の塾の先生を活用するという事は、今の仕組みの中では致し方ないのかなと。稚内の場合は、恵まれている形で塾の先生もいらっしゃるので活用が出来るということがあります。小学校は一人で全部の科目を受け持たないといけないというそのへんに課題が残ってくるのかなと。あとで話があると思いますが、1年生から中学校までという単元で中学校の先生がある程度補完しながら小学校の英語の面倒も見てもらうということも必要になってくるのかなという感じがします。

【工藤 市長】

先日、授業を見てきた感想も含めてですが、さっきの問題にも共通する部分はたくさんあるけれど、確かに小学校の先生は新しく英語が取り入れられたということで大変だなとは思いますが。さっきの成績もそうだけれど、基本的に日本語は非常に難しい言葉だけれど、それが理解されることによってほかの科目の理解度も高まるという面があり、そこは非常に大事だけれど、今回中央小学校の英語の授業を見てきました。さっき教育長がいていたように民間の塾講師が補助でいたんですが、さっきの他の教科もそうだけれど、しっかりとしたキャリアもあるし、指導方法もしっかりとしているし、何よりも指導に熱意があるというか、それは先生に対する嫌味ではなく、非常に子どもたちも熱心にそれに応えていて、誰が教師なのかよくわからないくらいしっかり、だからといって前に出てこない、必ず横にいてフォローをしてくれているんだけど、あれを見ていて、さっきの話じゃないけれど、日本の教科書は本当にこれでいいのかなと。勉強のレベル理解を高めるならもう少しちゃんとした、今回初めて取り組むんだということであれば、そういう教材というか、もっと参考にした方がいいんじゃないかと。

さっき国語の問題もあったけれど、何か漠然として暗中模索で触っているうちに6年生まで終わりましたという話ではなくて、もう少しきちんと、狙いはあるんだろうけれど、教科書もしっかりしてほしいなと思う。先生もちろんしっかりしてほしいと思うけれど。授業を1時間見せてもらったけれど、教室のまとももそうだし、子どもたちも熱心になっているし、確かに見ているうちにここでちゃんと理解できているなという確認も外から見ているとできるということでは、ただ、英語の授業を見るということだけではなくて、他の先生たちも是非あの指導方法を含めてみるべきだなと思って帰ってきました。あまり余計なことを言うと、先生に失礼なので、言わなかったですが。そのくらいいいわゆる全く違う場所で教科も別ですが、そういうところで育んできたキャリアとか指導方法は是非参考にしてほしいなと。それが逆に他の教科のレベルの向上にもつながるんじゃないかというくらい感動したということだけだけれど、喜んでみてきました。非常にそういう意味では、これからの子どもたちの理解がもっと深まることに期待を膨らませてくれることができました。それが今回の感想です。

【表 教育長】

先生の名誉のために言っておきます。大変熱心にしていて、チームワークというか、非常に噛み合った授業だということで本当に子どもたちの顔を見るとわかりますね。

【工藤 市長】

随分前だけれど、同じ中央小学校で3、4年生だったけれど、稚内市の未来を話しましょうという要請を受けて何年間か行って話をしたことがあるけれど、ほとんどそのときは15分経ったら子どもたちは手が動いたり、持たないなということがよく理解できたけれど、今回は全くなくてしっかりとしていて、先生もしっかり教えていたけれど、あんな熱意を持った授業は久しぶりに見たなという感じでした。全部がああいうふうになってくれればいいなと思っています。

【表 教育長】

ああいうのができるということが多分参考にしながら、ほかのところでも展開ということで、結構、英語補助員をうまく活用しながら進めてくれているようなのでこの制度を導入してもらって大変感謝しています。

【工藤 市長】

余計な話だけれど、私が見た先生も年齢的に60近かったと思うので、いつまでも第一線でやるかわからないけれど、先生がそれによって能力を上げていくか、ああいう人たちがたくさん出てくるかわからないけれど、うまい具合に交代して行ってほしいなと。

【表 教育長】

3年くらいを目途にまずはお願いをしたので、それに合わせて文科省の成果という形の中で入れていくということを言っていますし、先ほど山本委員がおっしゃったように稚内中学校が進めている義務教育学校ではそういう英語の専科の先生との一貫教育みたいなことになってくるんだろうと。まずは3年間をしっかりとやっていきたいと思っています。

【伊藤 委員】

非常に厳しいこと言うと、民間の教育のレベルがすごく高いと思います。そういう意味では、学校の先生が学ぶというところは多いと思っていますで、補助員がいる間にそのノウハウは蓄積しないといけないと思っていますし、学校の先生がやれることはまだまだあると思っています、それは民間ではすごくノウハウがある、もちろん先生も仕事ですが、民間は給料稼ぎ出すという方についているので生半可じゃない能力を使って、教育についてはかなりしっかりと取り組んでいると思いますので、そこは学ぶところはあるともいますので、英語をとっかかりに補助員の方から如何に盗めるかというところは重要だと思っていますし、先ほどの話にもかえりますが、教員の役割はどうなっていくんだろうと。補助員みたいなものが構造的に入るようになってきたら、教員の役割は何だろうという話になってくると思います。先ほどのAIの話もそうですが、過渡期だと思っています。教育がどうなっていくかというところのおそらく他の話でいうと、教員の方がどう考えているかだと思っていますが、そういうところに来ている時代

なんだなと改めて感じて、学校の先生の在り方が変わってくるんだろうなと気付いている人がどれくらいいるのかなと心配しながら見ていました。

【佐賀 委員】

私もいいなと思っていたんですが、唯一心配があるとすると、塾は意欲のある子どもが通うので学校だとそうでもない子たちもいるので、そこだけが少し心配だったんですが、伊藤委員がおっしゃったようにノウハウの力なのか、熱意も当然あるでしょうけれど、脱落している子を見る限りはいないと、まだ最初だからかもしれませんが。先ほど3年間という話でしたが、3年間でどれだけもし続けられないのであれば、先生方がやっていくしかないので、技術をうまく取り入れられるかというところでいくと、学校の中でそれこそ授業を録画して研究するとか、やっているかもしれませんが、そういうこともしっかりやっていただきたいなと思っています。

【表 教育長】

これについては、民間のノウハウ、指導案については、民間の方が作って、それが稚内で汎用できるような、そんなことを進めていくことが必要だろうと。そこは教育委員会としても是非その進め方をしていこうと思っています。

【門間 委員】

私も1度学校訪問で英語の授業を見せていただきました。すごく楽しさが伝わってきて、リズムと掛け合いと頭で考えて覚えようというのも結局体の感覚でリズムでというのは、小さい子ほど無条件に備わっている能力ですし、英語はそもそも体をつかんで話をしていくものなので、そういうところでは、他の授業のときに黙って座れないという問題もあるともいますが、表現するというのをうまく取り入れて楽しくやっているのが英語だなと思いました。先ほどの委員とも意見がかぶりますが、いろんなものに活かせると思うので、そういうふうにやっていけると先は楽しいなと思いました。

【事務局（地方創生課長）】

いろいろとご意見いただきました。ありがとうございます。全体を通してご意見ありますか。なければ、その他ということですがよろしいですか。なければ本日の協議事項をすべて終わりたいと思います。教育長より挨拶をお願いします。

(2) その他

※意見なし

4. 教育長あいさつ

【表 教育長】

本日は、総合教育会議の開催をさせていただきありがとうございます。我々もキャリア教育を進めていますが、先般稚内高校の先生が出前授業として稚内南中学校でキャリア授業をやったんですが、子どもも使えるような計算しつくした授業だったなと思っています。そのときに民間の人といろんな話を交

流会でしたんですが、稚内高校のキャッチフレーズが「稚内なんて言わせない」というものです。

私は、あの言葉はポジティブなのかネガティブなのかわからない言葉だなと思って胸が痛い言葉ではあるなと感じていました。まさに教育の我々が置かれている現状があの言葉に子どもたちがそう思っているということは、我々が突きつけられている現実なのかなと思っています。

今日、教育委員さんいらっしゃいますが、教育委員会も主体的な責任の中で市長には総合的な立場の中で指導いただきながら、稚内の子どもたちが夢をもって将来生きていけるようなそんな教育を実現していきたいと思っておりますので、改めましてご支援をお願い申し上げ、終わりの挨拶とさせていただきます。今後ともどうぞよろしくお願いたします。

5. 閉会のことば

【事務局（地方創生課長）】

以上を持ちまして、総合教育会議を終了します。本日は、ありがとうございました。

○稚内市総合教育会議運営要綱第7条第3項の規定により署名する。

教育委員 門間 奈月

作成者 市川 美紀